

# 言葉と発達

いまだ子育てアドバイス  
連載・124



## 就学という 大きなハードル

その2

就学と転学、いろいろなお子さんたち



言語聴覚士 中川信子

就学や、転学について、これまでに私が経験したり見聞きしたりしたいろいろな例をお話しします。状況は変更してあります。

### 6年生まで通常学級で 過ごしたAさん

赤ちゃんのときから、発育が遅めで、知的な発達の遅れがあると思われたAさん。保育園で「みんなと一緒に」の楽しい生活を送る姿を見たご両親は、就学時健診で指摘されたけれども就学相談を申し込まずに通常学級での生活を選びました。校長先生は正直、アタマを抱えていました。こういう場合、なかなか担任の引き受け手がないからです。学校には学校側の事情というものがあるのです。

ところが、1年生のときも、2年ごとのクラス替えのときも「Aちゃんを中心にしたクラスづくりをします」と

だそうです。

その後、転学の手続きは順調に進み、2学期から固定制の特別支援学級に通うことになりました。たまたまクラスの人数が少なく、中途からの転学を受け入れられる状態だったことが幸いしました。経験豊富な担任が、個別ニーズに応じた教材を工夫し、生活面での自立もしっかり指導してくれました。今は元気に作業所に通っているAさんですが、中学固定級に移ってしばらくは、「どうして、もっと早く、こういう楽しい学校があるって教えてくれなかったの？」と、何度も残念がっていたそうです。口には出さなかったけれど6年生ころからは自分がほかのみんなと違う、ということに疑問を抱いていたようです。

ご両親は「本人が幸せそうなので、結果的にはこれでよかったと思う反面、最初から、能力に合った集団を選んで

いう熱意ある担任に恵まれ、勉強面ではついていけないものの、楽しい学校生活を送っているようでした。差別的なことを言う子がいると、担任はきびしく注意しました。そういう担任の姿勢は、クラスの子たちにも伝わり、みんなAさんを大事にしました。

3年生の2学期ころは、急激に抽象的な課題が増えて学力差が目立ってくる時期です。少し表情が暗くなってきたことが気になってきた両親は、「どうする？ もっと勉強がラクなクラスもあるんだよ。あなたが選んでいいよ」と本人に尋ねました。しかしAさんは「いやだ、今の友だちとずっと一緒にいたい。自転車に乗って遊べるから」と答えました。親はそれを尊重しました。

5、6年になると授業の内容はほとんど分からず、ノートに絵を書いて時間を過ごしていました。同級生たちは、「Aちゃんは、いつまでも大きくならな

い赤ちゃん」と見て、いろいろな場面で手助けし、Aさんも世話されることに慣れていました。いい意味での「特別扱い」だったともいえます。そしてそのまま校区の中学へ進学。1学期の半ばに学校へ行けなくなりました。別の小学校から進学して来た同級生たちからのからかいと、授業ごとに先生が変わり、自分のことは自分でしなければならぬ学校の流れについて行けなかったからです。

たまたま知人を介して障害のある子どもの教育に携わる人に相談したところ、校区の中学の特別支援学級（固定制）を見学してみるよう勧められ、教育委員会を通じて見学を申し込み、本人も一緒に見学に行きました。本人にとっては「体験入学」です。

10人いないこちんまりしたクラスでの体験のさなか、Aさんは「先生、私、明日からこのクラスに来る！」と叫ん

いたら、もっと違った姿になっていたのかな、と、思うこともあります。でも、通常学級のときの友だちは今も声をかけてくれるので、やっぱりこれでもよかったのかな、と思ったり、心は複雑です」とおっしゃいます。

担任に恵まれ、世の中の人たちは信頼できる、という思いで小学生の時期を過ごすことができたAさんは、幸せものです。学校で学ぶのは勉強だけではないのですし、Aさんのふわーんとした性格が、周りの人たちの支援を上手に引き出したのかもしれない。周りの子たちも、Aさんの存在によって、たくさん学ぶことを学んだことでしょう。不登校が始まってからいち早く対応した両親、教育委員会の協力的態度、移る先の学級の側の人数の条件や担任の力量など、二重にも三重にも幸運が重なりました。

よかったね、Aさん。

護者との大バトル、クラスのほかの保護者たちとの対立など、山あり谷あり、天気の日も土砂降りの日もあり、ともかくBさんは小学校を卒業しました。親御さんは中学からは特別支援学級にと考えていたので固定級に進みました。半年ほどしてお会いしたとき、「中学に入って1学期は、そうでもなかったんですが、2学期の授業参観に行ったら、教科書を大きな声で、しっかりと前を向いて読んでいたのでびっくりしました。小学校では自信なげにぼそぼそと小さな声しか出ていなかったです。から。小学校に入る前の就学相談のときに『自分の居場所を見つけて、自信を持って暮らせる人になるように、そのことを考えてあげてね、心の安定は一生のことだから』と言われたことが、急によみがえってきて。親の信念は信念として、子どもにはかわいそうなことをしていたのかな、って思わな

## 中学から固定学級に移ったBさん

ダウン症のBさんは、「障害のある子もない子も、みんな一緒に育つべきだ」との信念を持つ親御さんのもと、保育園に続き、小学校も通常学級を選びました。就学相談の申し込みをして、固定級の学級が適当との判断が出ましたが、親御さんは絶対に通常学級で、と言いつけました。

Bさんの住む自治体では、就学指導委員会の判断を拒否して通常学級へ就学する場合には保護者の付き添いが求められます。親ごさんは、「障害があるからといって、家族だけに負担がかかるのはおかしい」とそれを断固として断りました。「それに、身辺自立については、ちゃんとしつけてあるので、つきっきりでいなければならぬ理由はないと思う」ということでした。

いでもないんです。まあ、終わったことだから、よかった面を考えるしかないですけれど」と。

Bさんの場合は、性格の強さのほかに、お母さんが、学校だけが生活じゃない、とばかりにダンスや、水泳、お料理教室や音楽と、いろいろなおけいごとや、障害のある子どもたちのためのグループ活動に積極的に参加し、学校以外にもいつもたくさん楽しみがあつた、ということが幸いしたのだらうと思います。

よかったね Bさん。

## 中学卒業まで通常学級で

Cくんは、自閉症のお子さんです。特別支援学校高等部に通う今も、ことは単語でいくつか、という程度で、知的な遅れも大きいと考えられています。

1年生は36人でのスタート。学校中も心配し、周囲の親たちも心配し、Bさんの親御さんも、もちろん、心配しました。意外にすんなりスタートできました。保育園時代からの友だちの存在が大きかったようです。

ことが不明瞭ではあるものの、自分の意思をはっきり伝えようとする、どちらかというと頑固な面の強いBさんなので、周りとのいざこざもあつた、しっかりと存在感を放っていました。「がんこなところはダウン症の特性だつて言う人もいるけど、これは絶対私ゆずりよ！」とお母さんは笑っていました。ほんとにね、全くだわ。

高学年になって、はた目からも辛そうに見えることがあつて「ねえ、もうそろそろ潮時じゃないかと思うけど」とお母さんに言ったこともありましたが、親御さんは断固たる姿勢。イジメもなかったわけではないし、担任と保

※「考えられています」としたのは、2007年11月号の書評でもご紹介のあった東田直樹くんのように、見た目には知的な遅れが大きいと思われる自閉症のお子さんが、豊かな内的世界を表現してくれる例が相次いでいるからです。私のごく近い場にも、そういうお嬢さんがいます。自閉症のイメージを変えなければならぬのでは、と私も思っているところです。

Cくんのお母さんは「障害があつてもなくても、みんなと一緒に育つことこそが必要だ、それによって、周りに迷惑もかかるかもしれないけれど、迷惑を受けることによって、障害のある人がいるということも周囲も気づいてくれるのだから」「誰かがそういう強引なやり方をしない限り、世の中の人たちは、障害のある子の存在に気づいてくれないから」と考えて、周囲にそれを支援する支援者もいました。

幼稚園時代、ほとんどの時間を園庭

で、鉄棒の下を砂を手のひらでササササッと払う遊びで過ごしました。

小学校に入っても、それは、ほとんど変わりませんでした。授業は全く分からないうちからと思われました。幼稚園、保育園から抜け出て好きなことをしているのが日常だったCくんは、小学校でも教室を抜け出しては、鉄棒の下に行き、砂をササササッと払って時間を過ごしていました。

所かまわずはだしで飛び出していくので、保護者の付き添いが求められました。もちろん保護者は拒否しました。やむなく市が介助員をつけましたが予算の関係で、毎日につけられませんが、介助員のない日は、専科の職員や、副校長、校長、養護の先生などが交代で、フル回転し、みんな疲れはてました。病気になる先生も出ました。一人で校庭に出ているCくんの姿は日常でした。それでも、5年生にもなると、だん

だんに、靴を履き、整列して、体育館まで行く姿や、図工の時間などに、きれいな色使いで熱中して制作する姿も見られるようになりました。

担任の先生は「障害のある子もない子と一緒に、って理念としては分かりますよ。でも、私たちは35人の子に勉強を教えるのが主たる仕事。保護者の協力もなく、理念を実現するのは、無理なんじゃないでしょうか。Cくんの親御さんは、『クラスにいるだけでなくて、Cに合った勉強もさせてほしい』とおっしゃいます。でも、今の通常学級は、座って、集中して話を聞いたり教科書やプリントに向かうことを前提にして成り立っているんです。Cくんに適したことは、この通常学級という枠組みの中では提供してあげられないです。教師として心痛みますが、どうしようもありません。どうしてあげられると思いますか？」と言われました。

「でもね、昨日はこんなことがあったんですよ！」とおっしゃいます。自分が大変でも子どもの成長に喜びを感じる。教員の面目躍如です。

「通常学級で育ったおかげでできるようになったことも多い」「地域で声をかけてくれる人もいてうれしい」と親御さんはおっしゃいます。確かにそうだと思います。Cくんは、同学年の子どもたちや保護者たちにとってよい意味でも悪い意味でも忘れられない存在であり、みんなどこかでCくんのことを気にしていましたから。

が、逆に、「丁寧な指導を受けられたら、もつとできていたのでは」と思えることもたくさんあります。身の回りの始末、食事のマナー、他の人とのコミュニケーションのとり方、など。うちでもきちんと教えられてきた経験がないので、高等部でいろいろなことを教えるようになると、拒否したり、暴

れることもあるそうです。体も大きいので、なかなか大変です。

高等部を出たあと、60年以上続くはずのCくんの人生。親亡き後は他の人の援助を受けて生きていくことになるでしょう。苦しい現実だけれど、Cくんの親ごさんには、そういう長いスパンで物ごとを見て、忠告したり、支えたりしてくれる人がいなかったのでしょうか。残念なことです。

Cくん、元気でね！



## 発達障がいを持つ子の 「いいところ」応援計画

阿部利彦 著 本体一七〇〇円＋税

子どもの「問題点」を指摘して直そうとするのではなく、「いいところ」を見つけて応援しようという素敵な提案。実践的で、わかりやすく、ハートフルな本。先生方からも、親の方からも、期待を集めています。

- 1章 子どもたちから教わったこと
- 2章 大人のまなざしを変えよう
- 3章 心のストライクゾーンを広げよう
- 4章 「いいところ」応援計画とは
- 5章 「いいところ」応援計画の実例
- 6章 教師による「いいところ」増やし
- 7章 家庭や学校でできる「言葉かけ」
- 8章 保護者と教師で「いいところ」応援計画をすすめる

アマゾン  
発達障害部門  
第1位！

◎すいせんします◎  
\* 柘植雅義先生  
\* 山岡 修さん



## 発達障害をわかってほしい

●島田 博著 本体一六〇〇円＋税

アスペルガー症候群の子どもと家族が学校で出会った数々のことを父親の願いを込めて、勇気を出して書いた。

## 発達障害の子を育てる母の気持ち

●松下 薫著 本体一五〇〇円＋税

子どもたちも理解し支援してほしい。それと同じくらい、子育てに悩む母親のことも理解し支援してほしい。母親の悩みと喜びを切々と綴る。



ぶどう社

東京都千代田区神田小川町 3-5-4-905 \*お急ぎの方は当社へご連絡を。送料無料  
TEL 03-5283-7544 FAX 03-3295-5211 ホームページ www.budousha.co.jp